

浪速の心意気が守る路地

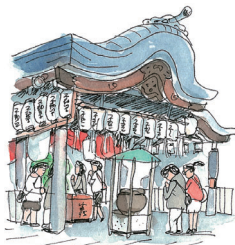
大阪・法善寺横丁

派手な装飾やビル前面に吊るされた巨大なカニやフグの張りポテの下で、毎日が初詣のような喧騒が繰り広げられる大阪・道頓堀界限。その一隅に、明治時代から変わらない情緒を漂わせる横丁があります。

ダメ亭主を支える一途な浪花女の心意気を描いた、織田作之助の小説『夫婦善哉』。その舞台にもなった法善寺横丁がそれ。道幅3m弱、全長80mのつまましい通りながら、両側に老舗のバーや上品な和食の店などが軒を連ね、大衆的な歓楽街の中で異彩を放っています。

京都・石堀小路で京都市電の敷石に触れましたが、常に打ち水されて風情あるこの石畳も、元は大阪市電の敷石です。ついでながら銀座の歩道も都電の御影石。

実はこの横丁、平成に入ってから二度の火事に遭いました。普通、再建には建築基準法に従って道幅を4mに広げないといけません。しかし、伝統の横丁を守るべく数十万の署名が集まり、特例措置を適用して3項道路として元の道幅が守られたとか。防災は大切。さりとしてルール一辺倒にならないあたりが、大阪らしいゆとりと分別。いや、集客を狙ったりアリゾムかな。



商売繁盛と良縁祈願の参拝客が絶えない「水掛不動尊 法善寺」



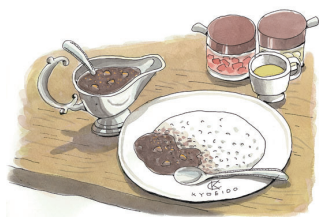
校門を抜けるとテレビ局だった

—— 神田駿河台

御茶ノ水駅周辺は日本有数の学生街。ソルボンヌをはじめ13の大学が集まるパリのカルチェラタンにちなみ、「日本のカルチェラタン」と言われた時代もありました。1960年代以降は、都市部への人口集中を制限する「工場等制限法」施行を背景に多くの大学が郊外へ移転しましたが、ここ10年は都心回帰の動きが加速。そのせいも、久しぶりに歩くまちは学生で溢れ返っています。

かつては鳶の絡まる学び舎のイメージがあったキャンパスですが、都心では多くが高層化し、オフィスビルと見分けがつきにくい。そんななか、往年の面影を残す建物に遭遇しました。大正10年創立の「文化学院」です。実はここ、その昔は与謝野晶子や菊池寛、山田耕筰らそうそうたる教師陣が教鞭を取った専修学校。自由な教育環境のゆえか、人気アーティストやミュージシャンも輩出しています。

ただしキャンパス自体は数年前に移転し、現在はBSのTV局が入る14階建てビルに様変わりしましたが、アーチ型の入口は美しく再現されています。この手法は近くにある主婦の友社ビルと同じですが、経済合理性と景観保全を考えたいい手かもしれません。まちは、そこで生きた人の記憶の集積。ましてキャンパスは深い視点と見識を涵養する場です。後世に風景を残す知恵を絞ってほしいものです。



学生街といえばカレー。靖国通りの「共栄堂」は界隈で人気店の一つ

